

枚の図と57枚の写真は、ときに本文以上に時代ごとの景観の特徴を如実にあらわしており、それ自体が高い価値を有している。欲をいえば、これらの図や写真がフランスのどの地点のものであるのかを示すような図があると、フランスの地名に疎い一般的な日本の読者の理解もより深まったと思われる。

日本と同様に、フランスにおいても、景観・風景はきわめて今日的な課題となっている。該博な知識に基づいた本書が、アカデミー＝フランセーズ賞（歴史部門）・フランス環境庁賞・フランス地理学会賞といった数々の賞をうけたのもうなずけることである。

訳者である高橋・手塚両氏は、共同調査・共同執筆の機会を通じて著者と親交があり、フランスの事情にも明るい。その結果として、読みやすい翻訳になっており、訳書としての本書の価値を高めている。今後、フランスやヨーロッパの歴史地理をとりあげる場合、本書はまず欠かすことのできない文献である。また、日本における景観論、あるいは歴史地理学や文化地理学を考える上でも大いに参考となる。さらに、読者の視点によってさまざまな読みとり方が可能な本書は、地理学にとどまらず、幅広い分野から注目を集めることになろう（その一証左として、1998年11月のNHK衛星放送「週刊ブックレビュー」において本書が紹介されたことを付言しておく）。

（三木一彦）

#### 知井村史編集委員会編

##### 『京都・美山町 知井村史』

知井村史刊行委員会、1998年3月、

B5判 340ページ 定価3000円（税・送料を含む）

旧京都府北桑田郡知井村（現美山町知井地区）といえば、京都大学農学部演習林として知られる広大な芦生の森、あるいは重要伝統的建造物群保存地区に指定された茅葺き民家集落・北村などによって、近年、マスコミにもしばしば取り上げられるようになった、丹波山地の奥深い山里である。この知井村にとって初めての本格的な通史書が刊行された。題して『京都・美山町 知井村史』、B5判で三百頁を超える大冊である。

しかし、旧村を単位とすることからも窺われるように、本書は通例の地方自治体史ではない。本書は旧知井村を母胎とする知井自治会が自ら企画し、自らの手によって作成した書物であるところに、かけがえのない意義がある。

本書刊行の経緯は、知井村史編集委員長である中野文平氏の序文に詳しいが、そのなかで中野氏は「今日、地域のおかれている危機的な状況は、固有の風土と社会の中で積み重ねてきた先人の知恵から学ぶことをないがしろにしてきたがゆえに、変動の激しい現代を確乎とした視点から見据えて行動に移す度量を持ち得なかったことにこそ、原因があったようにも思われる」と、本書刊行のきっかけとなった危機感について語っている。村史刊行委員会結成以来、本書刊行まで十年の歳月が経過したというが、この間、実際に上述の茅葺き民家集落・北村の伝建指定（平成五年）へのプロセスと美山民俗資料館開設など、地域の歴史文化を全国に発信し後世に伝える「行動」が並行していたのであり、本書刊行もそうした大きな「行動」の一環をなすものといえる。

本書は、史料収集、解説、分析から記述に至るまで、いわゆる専門家にこれらを委託するのではなく、地域住民が自らの手で成し遂げたものである。しかも、ここに用いられた史料の多くは初めて紹介されるものであり、その豊かさには驚きを禁じ得ない。14～16世紀の書き込みをもつ「智伊村大般若経」や、近世山村生活の諸相を伝える佐々里区有文書など、今後の山村研究にとって重要な史料群がペールを脱いだ。しかも、史料は丹念に分析されており、近世の章に盛り込まれた人口動態・家族形態に関するデータはまさに圧巻といつてよい。こうした新史料を駆使して、実証的に通史が叙述されているのだが、その語り口は平易で、地域住民にもわかりやすく面白く読めるように、ストーリーをもった楽しい読み物に仕上げられているのも本書の重要な特色である。

本書によって明らかにされた事実は枚挙にいとまないが、筆者の関心からすれば「知井の十名」の問題が大変興味深い。この地域では現在も「名（苗）」の組織が生きており、藩政村とは異なる社会集団として機能しているが、本書では中世に起源をもつ名の歴史的な変容や、藩政村を越える家々の結びつきのあり方、また名による山林所有の実態などが解き明かされており、中国山地の山村における村と「名」との関連を考察するための重要な事例となるだろう。また、近世における山の生業や近代以降の林業の実態についての詳しい叙述も、山村研究にとって重要な事例となるに違いない。さらに芦生の京大演習林問題などでは、単なる通史を越えて、当時の村の決断の背景や期待、

その問題点なども省察されており、地域住民にしか描き得ない叙述となっている点も、本書ならではの魅力であろう。

もちろん、用語の解釈などで疑問と思われる点もいくつかみられたが、それらは決して本書刊行の意義を損なうものではない。むしろ研究者サイドからすれば、次に是非「史料集」も公にしてみたいと念願する。本書では史料は主要なものに写真が掲載されているほかは、口語訳、あるいは図表化など、加工された形態で紹介されているためであり、原史料に当たりたいと思う箇所が少ないからである。なお、人口に関する節の末尾に、史料類はパソコンに記録しているので、「お申し出下されば便宜をおはかりいたします」という有り難いコメントが付されている。

本書の執筆者は、序文中に、前近代は石川賢司氏、近現代は中野文平氏の担当と記されている。これら担当者に敬意を表するとともに、わが国の山村問題や村落社会に関心をもつ人々に広く本書を推薦したい。なお問い合わせは、〒601-0711 美山町知井会館（TEL 0771-77-0001）まで。

（吉田敏弘）